

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13594

研究課題名(和文) アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究 - 聖像の所有と継承に注目して

研究課題名(英文) Anthropological study on the development of cult of saint in Andes

研究代表者

八木 百合子 (Yagi, Yuriko)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・准教授

研究者番号：80622133

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代アンデス地域における聖人信仰の展開をとらえることを目的に、人々が所有する聖像の実態とその継承プロセスについて調査分析を行った。聖像の継承に関する調査では、親族間での世代を越えた垂直的な継承や友人など親しい間柄で行われる水平的な継承に加えて、第三者からの継承というこの地域特有のパターンが存在することが判明した。特にこの第三者との間での継承を支えているのが、リモスナ(施し)という言葉に代表されるキリスト教的な考えであり、そうした宗教的な信仰と人々の主体的な実践が聖像というモノの継承とその信仰の発展を可能にしてきた点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は第一に、聖像というモノに着目し、その継承プロセスを明らかにした点である。ここでの継承は、一般の人々の手を介して行われるものであり、教会や宣教師の活動を中心にした場合とは異なるレベルで展開されるものである。第二に、モノとそれをめぐる人々の実践に注目し、聖人信仰の広がりを捉えた点があげられる。従来のキリスト教研究は、物質よりも精神を重視する立場にあるため、モノとの関わりから信仰について論じることは否定的に捉えられてきたが、信仰の発展におけるモノの重要性に光をあてた本研究は、宗教研究の新たな可能性を切り拓く視点を提供したといえる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I research and analysis of the actual situation of religious statues owned by people and the process of their transmissions, with the aim of capturing the development of cult of saint in the contemporary Andean region. The research on the transmission of religious statues revealed that in addition to vertical transmission across generations among relatives and horizontal transmission among friends and other close relations, there is a pattern of transmission from third parties that is unique to this region. In particular, the study revealed that the transmission to third parties is supported by the Christian thought represented by the word "limosna", and that such religious beliefs and people's practices have enabled the transmission of objects such as religious statues and the development of their beliefs.

研究分野：文化人類学

キーワード：アンデス パルー キリスト教 聖人信仰 聖像 所有 継承 モノ

1. 研究開始当初の背景

産業化やグローバル化の加速を背景に近年、宗教的な領域における商品化もかつてないほど急速に進んでいる。特にペルーでは、以前は聖地や特定の教会でしか礼拝できなかった聖人の聖像でさえも、その複製品が大量に世に出回っており、そうした聖像が導入された地方の村落ではそこから新たな信仰が生み出されている。聖像 = モノの流通の拡大は、聖人をめぐる人々の宗教実践を変容させ、それはまた近代以降、カトリックの教会権力の衰退とは裏腹に活性化を続けるアンデス地域の聖人信仰を下支えしていると考えられる。

しかしキリスト教世界においては神学上、物質より精神を重視する立場をとるため、従来の宗教研究においてモノあるいは物質性から信仰形成を論じることは否定的にとらえられてきた。また、聖書や祈祷書の朗誦など言語的媒体を通じた教義理解の促進や信仰心の育成を重んじるキリスト教において、布教活動で重視されるのは一連の儀式を司る宣教師たちの実践であり、それに付随するモノは副次的な存在でしかなかった。

だが、上述のように多くの聖像が流通し、一般の人々でも聖像を所有することが容易になった現在、聖像の存在は聖人信仰の動向を考えるうえで一つの大きな手掛かりとなりうる。実際、申請者のこれまでの調査・研究(「モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究」研究活動スタート支援 [H27~H28年度])からも、ペルーでは近年の市場経済化により、特に首都を中心に聖像の生産・流通が拡大しており、それがペルー国内の都市と農村を往来する人の動きのなかで拡散している現状が浮かび上がってきた。つまり、そこでは教会や修道会によって導入される教義や信仰といった従来の形態とは異なり、モノを介して展開される人々の主体的な実践が信仰の形成や発展に大きな力を発揮しているのである。と同時に、従来のようにその所有が教会や村落などに限定されない点がみえてきた。すなわち、自宅など個人の私的領域においても聖像を所有している人が少なからず存在するのである。

2. 研究の目的

本研究は、人々の聖像所有の実態とその継承プロセスに着目することで、現代アンデス地域における聖人信仰の展開をとらえることを目的とする。特に個人の私的領域においてみられる聖像をめぐる実践をみていくことで、信仰の発展においてモノがいかに関わっているのかを明らかにする。これを通じて、宗教の領域におけるモノの役割やモノについての新たな議論の展開をめざす。

3. 研究の方法

本研究では、数ある聖像のなかでも特にペルーの多くの家庭にみられる聖像の一つとして、ニーニョ像(幼子イエスの像)に焦点をあてながら、この信仰が盛んなペルー南部のクスコ市で調査を実施する。その際、以下の点を中心に調査・分析をすすめる。

(1) 個人/世帯レベルにおける聖像所有の実態

人々がどのような方法で聖像を入手し、自宅など私的領域においていかに管理や取扱いが行われているのかについて参与観察と聞き取りを行う。

(2) 聖像の継承プロセス

聖像がある一定の役割を終えて以降、あるいは所有者が不在/不要となった場合にいかなる行く末をたどるのか、また、どのような場合にいかなる人に継承され、そこに関わる人々がどのような関係にあるのかを聞き取り調査の情報をもとに分析する。

(3) モノを介した信仰のメカニズム

以上の調査で得られた情報をもとに、モノの継承が人々の信仰といかに関わってくるのか、そのメカニズムについて考察を行う。

4. 研究成果

本研究ではペルー南部クスコ市を中心に、聖像の所有の実態と継承のプロセスについて調査を実施した。調査対象となるニーニョ像は、毎年12月から1月の間に多くの家庭に飾られることから、この期間を中心に調査を行った。調査では、主としてクスコ市南部のサン・ヘロニモ地区の住民の家を訪問し、現在所有する聖像の数や形態を確認するとともに、それぞれの聖像にまつわるエピソードや入手経路などについて聞き取りを実施した。これらの調査をもとに得られた結果は以下のとおりである。

(1) クスコにおける聖像の所有実態

クスコの人たちの多くが聖像を入手する機会として知られるのが、年に一度開催される「サントゥランティクイ」と呼ばれる聖像販売市である。販売市は毎年12月24日に街の中心地に位置するアルマス広場で開催される。広場には聖像を販売する多くの露店が立ち並び、そこでさまざまな大きさや形の聖像が販売される。クスコでは、この販売市を通じて聖像を購入するのが一般的であるが、それ以外にも家族や知人など親しい人から聖像を譲り受けるというケースも広くみられる。そのため、クスコの人たちのなかには、複数のニーニョ像を所有する人も少なくない。人々はそうして増え続けた聖像を、子供が結婚して独立した際に譲ったり、持ち主が高齢になり管理が出来なくなった時に身近な人に譲ったりということを頻繁に行っている。このように、それぞれの家では家族の成長とともに聖像が増減を繰り返しながら、長い年月にわたり所有され続けていることが分かった。

(2) 聖像の継承プロセス

クスコでみられるニーニョ像の継承には大きく三つのパターンがみられる。一つは上述のように親族の間で行われるもので、通常は親から子または孫など世代を超えた継承である。こうした世代間の垂直的な継承に対して、二つ目として友人や知人など親しい間柄で行われる水平的な継承がある。そして三つ目は、見ず知らずの人(第三者)から聖像を譲り受けるというパターンである。この第三者からの継承は、この地方に伝わる独特のやり方であり、クスコでのニーニョ像の継承プロセスを理解するうえで重要な意味をもつものといえる。

この第三者からの継承には次のような特徴がある。クスコの人々の話によれば、まず、聖像を持った人が突然家を訪ねてきて、聖像を差し出すということが行われる。差し出された聖像を受け取る場合、受け取る側は差し出した側に対して金銭を渡す。ただし、この金銭の額については定まっておらず、聖像を受け取る側が決める。そして渡された金銭と引き換えに聖像を受け取るというように、ここでの取引はモノと金銭の交換の一形態とみることができる。しかし、興味深いのは、この金銭を渡すことに対してクスコの人たちの間では、施しや布施を意味する「リモスナ」という宗教的な用語が用いられている点である。つまり、こうした聖像と金銭の取引が、リモスナという宗教的な贈与の一つとして読み替えられているのである。この点こそが親族の枠組みを超えた聖像の継承とその持続性を確保するうえで重要な側面であると考えられる。

(3) モノがつなぐ信仰

クスコの人たちの聖像をめぐる実践から明らかになったのは、一つの聖像がさまざまな形で数世代にもわたって継承されていることである。そこでは、聖像の持ち主が不在になったり、不要とみなされた聖像が行き場を失ったりした場合であっても、親族や知人だけでなく、第三者にまで継承の可能性を広げることで、その存在が確保されてきた。特にこの第三者との間での継承を支えているのが、リモスナといった言葉に代表されるキリスト教的な考えであり、そうした信仰のある人の手を介して、聖像は新たな持ち主の手に渡り、後世にまで引き継がれてきたとみることができる。このように、人々の主体的な実践と信仰がモノ＝聖像の流通を可能にしているのである。

以上のように本研究では、現代アンデス地域でみられる聖像の所有と継承をめぐる実践から、人々の信仰の様態をとらえてきた。聖像は礼拝のために用いられる道具としてだけでなく、人々の信仰やその広がりをみていくうえでも重要な意味をもつものである。ゆえに、こうしたモノとそれをめぐる人々の実践を丹念にたどることで、教会や宣教師によって導入される信仰とは異なるレベルで展開される聖人信仰の様態をとらえることが可能になるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 八木百合子	4. 巻 182
2. 論文標題 拡がる消費と宗教的なモノ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 pp.92-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木百合子	4. 巻 173
2. 論文標題 受け継がれるアンデスの聖像	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 pp.94-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木百合子	4. 巻 42
2. 論文標題 宗教的なモノをめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊みんぱく：特集「モノに願いを」	6. 最初と最後の頁 pp.2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木百合子	4. 巻 160
2. 論文標題 モノから信仰をとらえる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 民博通信	6. 最初と最後の頁 pp.16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 八木百合子
2. 発表標題 宗教的なモノをめぐる実践 ペルーにおける聖像の所有・管理・継承
3. 学会等名 MMPステップアップ講座
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuriko Yagi
2. 発表標題 Utilizacion de Recursos Culturales Andinos: Construccion de Base de Datos Interactivos
3. 学会等名 Simposio Internacional "50 años de Antropología Japonesa en el Sur de los Andes: Recorridos, Etnografías y Valoración Cultural" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八木百合子
2. 発表標題 アンデスにおける宗教的なモノの所有と継承 聖像をめぐる事例から
3. 学会等名 国立民族学博物館研究懇談会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八木百合子
2. 発表標題 モノがなくなぐ信仰 ペルーにおける聖像をめぐる実践から
3. 学会等名 国立民族学博物館・共同研究会「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yuriko Yagi (ed.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 National Museum of Ethnology	5. 総ページ数 265
3. 書名 Etnografia Andina (Senri Ethnological Studies 111)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>(1) 国立民族学博物館・共同研究「モノをとらえてみる現代の宗教的世界の諸相」(2017 - 2020) 宗教の領域におけるモノの役割やその現代的な意義についてより広い観点から検討するために、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教など異なる宗教や地域の専門家を集めた共同研究を立ち上げ、それぞれの事例や現状の比較分析をおこなった。 https://www.minpaku.ac.jp/post-project/5193</p> <p>(2) 地域研究画像デジタルライブラリ (Diplas) プロジェクト 本科研の研究課題に関連して、Diplasの支援により2018-2019年にアンデス地域の民族調査画像のデジタル化プロジェクトを実施した。本プロジェクトでは、主として民族学者であり考古学者である藤井龍彦が1966年から1990年にかけて南米アンデス地域で撮影した写真6607点をデジタル化・データベース化し、当該地域の社会変化を跡付けることを可能にした。その成果を、藤井龍彦「アンデス民族・考古学調査写真」コレクションとして一般公開した。 https://www.r.minpaku.ac.jp/x-diplas/diplas/database.html</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Tradicion Andina	開催年 2019年～2019年
----------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------